

Bernard Malamud の小説における父と息子

— 初期短編から *The Assistant* へ —

三重野 佳 子

序

Bernard Malamud の作品全体を見渡すと、一つの特徴に気付く。多くの作品で、そこに登場する家族には、娘はいても息子がいない。また、主人公には父がいない（いても、父親としての役割を果たしていないので、象徴的にいない）。

たとえば、*The Natural* の主人公、Roy Hobbs は祖母に預けられ、祖母亡き後は父の仕事の先々で孤児院に預けられて育つ。*The Assistant* の Morris Bober には息子がいたが、幼い頃に死んで、今は娘しかいない。Frank Alpine は孤児院で育った孤児である。*A New Life* では、主人公 Seymour Levin の父親は盗みを働いては刑務所行きを繰り返して獄中死、母は自殺している。また、Levin の不倫相手 Pauline の夫 Gerald は精子がなく子供ができないため、二人の子供は養子である。*The Fixer* の Yakov Bok の母は彼を産むときに死に、父は1歳の時に、ポグロムで殺されている。妻 Raisl の父 Schmucl には、息子がいない。また、Yakov 自身にも子供はできず、Raisl と他の男との間にできた子供を自分の子として認める。*Dubin's Lives* においては、主人公 Dubin の息子は妻 Kitty の連れ子で実の息子ではない。このように、マラマッド作品には、父のいない息子と息子のいない父親とが、たびたび登場する。

Irving Malin によれば、元来ユダヤ人の父と息子は、聖書のアブラハムとイサクに見られるように、父は息子の良き教師、息子は父に従順に従う弟子という関係にある。しかしながら、ユダヤ系アメリカ文学においては、この構図は変容を遂げる。このことについて、マリンは次のように述べている。

What is remarkable is that the father-son relationship is rarely hostile. There is little rebellion against legalism. ... But such traditional relationships do not last. It is not my purpose here to explain the reasons for this change; it is evident, however, that our seven writers deal with imperfect father-son relationships in which rebellion supplants acceptance; violence replaces tenderness; and fragmentation defeats wholeness. Thus the father-son relationship mirrors the moment of exile: the Jewish-American family is no longer holy or symmetrical. (33)

ここで、マリンは7人のユダヤ系アメリカ作家の作品について論じているが、マラマッドの息子のいない父、父のいない息子もまた、伝統的父子関係の崩壊、不完全な親子関係を、象徴していると言えるかもしれない。アメリカにやって来たユダヤ人の父には、もはや息子が素直に教えるを聞くことは期待できず、ユダヤ人の息子は父から学ぶべきことを持たないのである。

しかし、『アシスタント』のモリスとフランクという息子のいない父、父のいない息子については、明らかにフランクがモリスの跡継ぎとなり、現実にも精神的にも後継者となる。マリンも、『アシスタント』については、伝統的親子関係に逆戻りしていると説明する。父の不在、息

子の不在が、一方では、アメリカ社会への同化に伴う、ユダヤの伝統的父子像消滅の比喩となっているというのに、『アシスタント』の、実の父子ではない義理の父と息子の中に、少なくとも精神的に継承が行われるという事実はどのような意味を持つのだろうか。父の不在、息子の不在が、それ自体としては、伝統的家族の崩壊、ユダヤ人のアメリカ化を象徴するにしても、彼らが登場するそれぞれの作品内においては、この構図は作品ごとに異なった役割を担っているのではないか。

1986年のマラマッドの没後、1989年に出版された *The People and Uncollected Stories* には、生前、短編集の中には収められなかった作品が、収録された。その中には、マラマッドが『アシスタント』の断片、あるいはモチーフとして書いたと考えられる短編が含まれている。本論では、これらの短編の中で、父親と息子の構図がどのように描かれ、どのように『アシスタント』に取りこまれて行くのかをたどることによって、この構図が作品の中で果たしている役割について検討したい。

The Assistant の原型

マラマッドにとって二冊目の本となる『アシスタント』が出版されたのは1957年である。この年までに、マラマッドが雑誌に発表した短編には、『アシスタント』同様、マラマッド自身が生まれ育った、ニューヨークの下町を舞台としたものが多い。その中には、明らかに『アシスタント』に取り入れられたと思われるプロットや場面が見られる。たとえば、“The Grocery Store”には次のような場面がある。

The icy February wind wrapped him in a tight, cold jacket, and the frozen snow on the ground gripped his feet like a steel vise. His apron flapped, and the wind blew his thin hair into his eyes...

“For godsake, Sam,” he [Mr. Fine] boomed in his loud voice, “put on something warm.”

The tenants on the top floor, a young Italian couple, came out of the house on their way to the movies. “You’ll catch pneumonia, Mr. Kaplan,” said Mrs. Costa.

“That’s what I told him,” Mr. Fine called back.

“At least put a coat on, Sam,” advised patsy Costa.

“I’m almost through,” Sam grunted.

“It’s your health,” said Patsy. (129-130 下線引用者)

妻になじられ、外に出て雪かきをする食料品店主サムに、近所の元警官や、上階に住むイタリア系の夫婦が声を掛ける場面である。

一方、『アシスタント』でも、店主モリスに上階に住むイタリア系の夫婦が声を掛ける場面がある。下線部分が似通っている事に注目してもらいたい。

To his surprise the wind wrapped him in an icy jacket, his apron flapping noisily ... Nick and Tessie came home from somewhere.

“At least put something warm on, Mr. Bober,” advised Tessie.

“I’m almost finished,” Morris grunted.

“It’s your health,” said Nick. (222 下線引用者)

短編「食料品店」では、食料品店の主人が寝室のラジエーターの火をつけそこない、ガス漏れで中毒を起こすという、『アシスタント』の一節と同じストーリーがこの後に続く。一方、『アシスタント』の引用は、モリスの死因である肺炎の原因となる場面として使われる。使用される状

況が異なり、人物や設定に多少の差はあるものの、よく似た物語、場面、描写、台詞が長編に組み込まれている。マラマッド自身が「長編のアイデアを短編で試みることもある」(23)と Daniel Stern のインタビューで語っていることから、一部の短編は長編の試作段階であるとみなすことができるであろう。

ところで、同じスターンとのインタビューで、その『アシスタント』のモデルとなった人や作品について、著者自身は次のように述べている。

DS: What is the source of *The Assistant*?

MALAMUD: Source questions are piddling but you're my friend, so I'll tell you. Mostly my father's life as a grocer, though not necessarily my father. Plus three short stories, sort of annealed in a single narrative. "The Cost of Living" and "The First Seven Years".... And a story I wrote in the forties, "The Place is Different Now," which I've not included in my story collections.(18)

また、『アシスタント』のノルウェー版の前書きでも二つの短編を挙げ、解説を加えている。

The apprentice character interested me, as he has in much of my fiction, the man, who, as much as he can in the modern world, is in the process of changing his fate, his life. This sort of person, not at all complicated, appears for the first time in my writing in the short story, "The First Seven Years" (included in my first story collection, *The Magic Barrel*), and I thought I would like to develop the possibilities of his type. The refugee shoemaker in the story becomes the Italo-American assistant, Frank Alpine, whose way of achieving his spiritual freedom is to adopt the burdens of a Jew. The grocery story background came from "The Cost of Living," another short story written in the early fifties, and now reprinted in my most recent story collection, *Idiots First*.(86)

マラマッド自身がソースとして挙げる“The Cost of Living” “The First Seven Years” “The Place is Different Now”の3つの作品のうち、「生活費」からは食料品店の物語が、「最初の七年間」からは徒弟的人物像の物語が、そして「変わってしまった場所」からは、マラマッド自身の説明はないが、職もなく、今日食べるものにも事欠いてさまよう浮浪者の若者たちの物語が、それぞれ『アシスタント』に組み込まれていった。つまり、原型として三つの系統の作品があり、これらが融合されて『アシスタント』という物語が作られた。では、これら三つの系統の作品には、どのような父、息子の原型が見て取れるだろうか。以下、その他の初期短編もあわせて検討しながら、それぞれの系統に登場する家族を『アシスタント』と比較してみる。

第一の系統：食料品店を舞台とした物語

まず、『アシスタント』の原型となる食料品店を舞台とした物語としては、「生活費」(1950)以前にも、没後出版された初期作品中に“Armitice”(1940)と“The Grocery Store”(1943)という二つの短編がある。これらもまた、『アシスタント』の原型と考えられそうである。なぜなら、まず、登場人物の名前が互いに似通っている。『アシスタント』で食料品店を経営する夫婦はモリスとアイダだが、「休戦」の主人はモリス、「食料品店」の妻はアイダと名づけられている。また、「食料品店」の店主の名前サムは、「生活費」の食料品店主と同名である。また、先にも述べたように、「食料品店」では『アシスタント』と全く同じ場面が描かれる。

当然のことながら、小説の構成は作品ごとに少しずつ変化する。登場する家族に注目してみよう。1940年、マラマッドが本を出版し始める以前の時代の作品「休戦」の登場人物は、食料品店

主の Morris Lieberman、その息子で14歳の Leonard、卸商の Gus Wagner の三人である。モリスの妻は、病気で亡くなっている。この作品の家族構成は、幼い頃に母を亡くしたマラマッド自身のものに近い。この家族には父と息子が存在しており、二人の間には互いをいたわり合う、理想的な父子の関係が保たれている。

これが、1943年の「食料品店」になると、食料品店を経営する夫婦と、店を訪れる食品の卸業者の三人が登場するだけで、息子の姿は消えている。前述のように、この作品のプロットや台詞の一部は、明らかに『アシスタント』へと引き継がれているにもかかわらず、家族の構成は『アシスタント』とも異なる。スーパーマーケットの進出で、明日にもつぶれそうな食料品店での、息も詰まりそうな夫婦の感情的やりとり、生活苦からお互いに苛立ちをぶつけ合う二人が、それでも相手を見捨てずに思いやる夫婦の情感に焦点が当てられる。このことは、「生活費」でも同様で、近所に進出したチェーン店に対抗できず、立ち行かなくなる食料品店の夫婦のみが描かれる。

この2つの作品が最初の「休戦」と異なる点は、子供がいないことだけではない。社会的背景が削ぎ落とされている点にもある。「休戦」に出てきたようなユダヤ人に対する差別、戦争といった具体的な歴史的・社会的背景はここにはほとんど見られない。その代わりに、貧しい食料品店という夫婦の生活を支える場が、二人にとっての足枷となり、目の前の生活を圧迫する抑圧的背景として描かれる。このような、マラマッド作品に頻繁に現れる、日々の生活の場が登場人物にとって抜け出せない牢獄となるイメージは、Robert Alter が指摘するように、人間が人間らしくあるために受け入れなくてはならない限界や制限を表わす比喻であり、こうした牢獄的状况で人間がどのように行動するかが、その人間を測る指標ともなる¹⁾。『アシスタント』においても、モリスの食料品店は、何度も牢獄に喩えられるが、第一の系統、食料品店を舞台とする短編から『アシスタント』へと引き継がれているのは、親子関係ではなく、食料品店という牢獄の舞台のようである。

第二の系統：娘しかいない家族と徒弟的人物の物語

三つの系統の物語のうち、実は登場人物の構成が『アシスタント』と一番良く似ているのが第二の系統の物語（徒弟的人物像の物語）である。これらの物語では、『アシスタント』と同じ、息子のいない、一人娘と夫婦の家庭が物語の舞台となる。まず、初期短編の中で、同じように娘だけがいる家庭を描いた、“Spring Rain”(1942)、“Benefit Performance”(1943) から、「最初の七年間」の徒弟的人物像の物語がどのように練られていったのかを時代順に追ってみる。

父親と母親と一人娘の三人家族の物語はどれも、娘のボーイフレンドをめぐる展開する。その最初の一つ、「春の雨」に登場するのは、主人公 George Fisher とその妻 Beatie、娘の Florence と、娘のボーイフレンド、Paul である。何気ない普段の体験すら、家族に伝えることのできないジョージは、常に心の中でひとりつぶやいている。妻に対して口にできない不満を、ジョージは“You didn't love me, but you said yes for Riverside Drive and your apartment and your two fur coats and the people who come here to play bridge and mah-jongg.”(111) とつぶやく。また、娘に対するつぶやきは次のようなものである。

“What a disappointment you are. I loved you when you were a child, but now you're selfish and small. I lost my last bit of feeling for you when you didn't want to go to college. The best thing you ever did was to bring an educated boy like Paul into the house, but you'll never keep him.”(111)

妻と娘が求めているのは、お金に不自由しない生活、ものの豊かさ、その場限りの楽しみであり、彼女たちが父の心を理解することはない。ジョージは、知的、精神的つながり、人間的なコミュニケーションに飢えており、その孤独が、つぶやきにイメージ化される。彼は、言葉を伝える相手を持たない、孤独な父親である。

ある晩、娘の留守中に訪ねてきたボーイフレンドのポールとジョージは散歩に出る。その時のジョージの喜びようは、“He felt a little like crying.”(113) というほどであり、さらに、自分の心がポールに伝わった時の喜びは“He felt a strange happiness to see how the story affected Paul.”(113) と描かれる。家族がいながら、心の通った会話ができず、長年孤独のうちに過ごしてきた父ジョージが求めているのは、自分の心を理解し、継承してくれる息子である。しかし、やっと現れた、心を伝えられる息子候補ポールは、娘を愛せないことをジョージに打ち明けるのである。父ジョージは、再びもの言えぬ孤独の世界へと戻っていく。

精神的遺産を継承してくれる息子を求める父と、娘の結婚相手をめぐる物語という構図は、この短編で初めて現れ、以後繰り返し登場する。この父親が体現するのは、経済的安定や豊かさのみを追い求める生活の中で、置き去りにされる心や精神である。これはこの家族に特有の現象ではなく、当時アメリカ社会へと急速に同化しつつあったユダヤ系移民たちの世界を映し出している。

もう一つの初期短編「慈善公演」も、ユダヤ人のあまり裕福でない家庭を舞台に、同じ夫婦と娘、ボーイフレンドという人物設定で進行する。物語では、娘 Sophie のボーイフレンドをめぐる言い争いが描かれる。父親 Maurice Rosenfeld はイディッシュ劇場の俳優で、今は仕事がなく、収入もほとんどない。家族は狭いアパートに住み、一人娘のソフィーには寝室もないため、居間で寝起きしている。妻は生計を支えるために働きに出ている。

この物語の父親モーリスが次世代に伝えたい心とは次のようなものである。

Even if I didn't support you and your mother steady, at least I showed you the world and brought you in company with the greatest Jewish actors of our times. Adler, Schwartz, Ben-Ami, Goldenburg, all of them have been in my house. You heard the best conversation about life, about books and music and all kinds art. You toured with me everywhere. You were in South America. You were in England. You were in Chicago, Boston, Detroit. You got a father whose Shylock in Yiddish even the American critics came to see and raved about it. This is living. This is life. Not with a plum-ber. (139)

ソフィーの花婿候補 Ephraim は、高校も卒業していない配管工だが、家族を養うに十分な収入がある。だが、話をしても Yes と No しか言えないイーフレ임을、教養もない、知的な会話もできない、息子候補失格者だと父は断ずる。それに対して、娘ソフィーは、“He's honest and he makes a nice steady living.”(139) とボーイフレンドを弁護し、イーフレ임을は、“At least a plumber can support a wife and don't have to send her out to work for him”(141) と反撃し、イディッシュ俳優としての誇りを胸に生きてきた父親の心をいたく傷つける。

『アシスタント』以後の作品になるが、この「慈善公演」を戯曲形式に発展させたのが、“Suppose a Wedding”(1963) である。この短編にも、同じモーリスという名前のイディッシュ俳優の父親が登場する。父は、娘 Adele の婚約者 Leon が気に入らない。レオンはスポーツ品店を営む大学出の若者だが、ユダヤ人であるにもかかわらず、その精神を理解せず、父の心を受け継ぐことができないからである。たとえば、父親は当てこすりのつもりで、ならず者と結婚した娘を嘆く父親役を、レオンの前で演じてみせる。ところが、息子候補は、そもそもモーリスのイディッシュ語の台詞がほとんど理解できない。あるいは、次のようなちぐはぐな会話が交わされ

る。

Feuer. Adele knows Yiddish perfect. She learned when she was a little girl. She used to write me letters in Yiddish—they were brilliant. She also had a wonderful handwriting.

Leon. Maybe she'll teach our kids.

[He is unaware of FEUER regarding him ironically.]

Feuer. [trying a new tack] Do you know something about Jewish history?

Leon. [amiably] Not very much. [afterthought] If you're worried about religion, don't worry. I was Bar Mitzvahed.

Feuer. I'm not worried about anything. Tell me, do you know any of the big Yiddish writers—Peretz, Sholem Aleichem, Asch?

Leon. I've heard about them. (174)

ユダヤの精神的遺産を受け継がせたい父親に対して、息子候補はイディッシュ語もまともに理解できず、ユダヤ人の歴史も知らず、イディッシュ作家の本も読まない。ユダヤ人であることは、単なる世俗的宗教儀式において辛うじて確認されるだけのものとなり、その精神的遺産の継承は危うい。モーリス、イーフレイムと同様、この父と息子候補の間でも、心の通った意思疎通がもはや不可能であるように見える。

この二つの短編には、単なる父親世代と息子世代の人生観の相違だけではなく、ユダヤ系移民のアメリカ社会への同化に伴う、世代間の価値観の相違が、鮮明に描き出されている。『アシスタント』でも娘 Helen が、兄が生きていた子供の頃には、モーリスがイディッシュ劇を見に連れて行ってくれたことを思い出す場面が出てくるが、イディッシュ演劇は、上田和夫氏によれば、「1880年代にはアメリカのユダヤ人移民にとって欠くべからざる文化活動」となり、20世紀初頭には、劇場に通う観客も多くなった。「しかしこのように隆盛を誇ったイディッシュ演劇も1940年代には陰りが目立ち始める。その理由はといえば、1920年代に移民制限法が成立したこと、古い世代がアメリカ化しつつあったことがあげられる。彼らはもはやイディッシュ語に興味はなかったのである。」という。1943年に書かれた、この「慈善公演」は、こうした現実を如実に反映している。作品中で仕事がない父親は、客の少なさを戦争のせいにして言い訳をするが、現実には、豊かな生活の実現を追い求め、アメリカ社会への同化が進んだ結果、ユダヤの伝統や文化、精神はなおざりにされ始めていたのである。

「春の雨」では、父の精神を理解する息子候補はいたが、父から息子への心の継承は、妻や娘のものへの執着、心への無理解によって成立しなかった。ものと心の対立軸は世代間には置かれなかった。それに対して、「慈善公演」では、父親が精神を継承させたくとも、娘とその交際相手である息子候補の世代が、それを不可能にする。置き去りにされ疎外される古い世代とその精神の不継承が、父親対息子候補との間に、ものと心の対立軸が置き換えられることで、表現される。ただし、ここでマラマッドは、父親が絶対的に正しい選択をしていると読者には思えない描き方をする。例えば、イーフレイムはたとえ高校を卒業していなくても、職業が配管工でも、人間として蔑視される謂れはないはずである。読者には、息子候補側の反論がもっともだとさえ思える。父の選択を、すべて正しいものとして受け取ることができない状況は、次の短編「最初の七年間」にも再び持ち込まれる。

靴屋を営む Feld 夫婦には一人娘 Miriam がいる。息子のいない父親には、時折、息子がいたらという昔からの思いがよみがえる。“An old wish returned to haunt the shoemaker : that he had had a son instead of a daughter”(3) 彼もまた、息子を待ち望む父親の一人である。父にとって残念なのは、娘ミリアムが大学で教育を受けることに、全く関心を持っていないことであ

る。ミリアムがいかにたくさんの本を読んでいようと、この父親にとっては関係がなく、重要なのは、大学に行き、医者や弁護士になる勉強をしていること、すなわち、社会的な地位の得られる仕事につけるかどうかである。だから、父親がうまくお膳立てをした大学生 Max との一度目のデートに出かけた娘から、マックスが会計学を勉強していると聞いて、会計士が何かを知らない父はがっかりするのである。しかし、CPA 公認会計士が社会的地位の高い職業であることを調べだした父親は、満足して二度目のデートの日を待つ。このように、息子の学歴を重視する父親像は、「春の雨」や「慈善公演」でも扱われたが、ここでは、マラマッドは学歴のある息子に対して必ずしも肯定的ではない。娘の口からは、マックスは“a materialist.”であり、“He has no soul. He’s only interested in things.”(11) と語られる。二人は二度のデートの後、再び会うことはない。

一方、靴屋にはヒトラーの収容所を逃れてきたポーランド難民の助手、Sobel がいる。秘かにミリアムに想いを寄せる読書家のソベルは、コメントをつけては本を彼女に貸し与えている。苦勞で年より老けて見えるこの助手が、安い賃金で、文句も言わずに父親の店を手伝っているにもかかわらず、フェルドは彼を将来の息子として考えたこともない。ほとんど賃金らしい賃金も受け取らず、本にしか興味のないソベルは、父の目には、変わり者“queer”(13) としか映らない。大学生マックスに娘の話をした夜から、店を出て帰ってこないソベルに、戻ってくるよう話をして行った父親は、“I always treated you like you was my son.”(14) と、現実とはかけ離れた言葉をかけ、ソベルに激しく否定される。ソベルの娘への思いを無意識のうちに否定してきた父親は、次のように気づくのである。

Then he realized that what he had called ugly was not Sobel but Miriam’s life if she married him. He felt for his daughter a strange and gripping sorrow, as if she were already Sobel’s bride, the wife, after all, of a shoemaker, and had in her life no more than her mother had had. And all his dreams for her—why he had slaved and destroyed his heart with anxiety and labor—all these dreams of a better life were dead.(15)

ここでは、父親自身が娘の幸せを願うあまり、ものにこだわり、心を見失う。父にも誤りがあり得ることがさらに明確に示される。

このように、マラマッドは、息子のいない家族の婿取り物語の中で、ものと心の対立軸の座標を次々と置き替えている。このことは、現代という時代背景の中で、必ずしも「父＝善」という構図が成り立たなくなっていること、旧来のユダヤ的父子関係はもはや成立しないことを暗示している。古い世代の価値観がすべて善とは限らず、また、新しい世代の価値観が正しいとも限らない。すべては混沌の中にある。その中で、一つの方向性を指し示そうとする時、これまでの作品で、男女間や世代間に表わされていた、ものと心の対立は、複数の息子候補の中に表現されることになる。この物語以降、息子候補は常に複数となる。このような構図を取ることで、マラマッドは、さまざまな価値観が溢れる中で、何を受け継いで行かなければならないのかを示すことが可能になる。「最初の七年間」の二人の息子候補は、父フェルドの人間性を、読者にもフェルド自身にも、明らかにする役割を担っていた。一人娘の婿候補選びの中では、父、母、娘、息子それぞれの人間性が問われる。息子のいない一人娘の家庭の婿選びは、それぞれの登場人物の人間像を浮かび上がらせ、その中で、受け継がなければならない最も重要なものは何かに光を当て、一つの仕掛けとして機能する。

複数の花婿候補から、息子となるべき人物を選ぶというこの構図が、最終的には『アシスタント』に取り入れられているものである。『アシスタント』の父親、モリス・ポーパーの息子イーフレームは幼い頃に亡くなっていて、今は結婚を考える年齢に差し掛かった娘のヘレンしか子供

はいない。しかし、マリンも指摘するように、モリスはいつも息子のことを思い、無意識に息子を待ち望んでいるようである。

ヘレンの結婚の候補者としては、近隣のユダヤ人家庭の息子たちが登場してくる。一人は、ドラッグストアを営むSam Pearlの息子Natで、大学を優秀第二位で卒業した野心家のコロンビア大学ロースクールの学生である。もう一人は酒屋を経営するJulius Karpの息子、Louisである。禁酒法が廃止されたときに営業免許を手に入れたカープの酒屋は、モリスの食料品店とは違って、大いに潤っている。ルイスは高校も中退し、父親の商売を手伝いながら、生活に汲々とすることなくのんびりと暮らしている。ナットもルイスも将来に豊かな生活が約束されている格好の息子候補であるから、ヘレンの母アイダは、娘と若者たちの関係に気が気でない。しかし、父親モリスにとって、ナットは“A showoff”、ルイスは“A stupe”(10)であり、どちらも息子候補とは認められていない。逆に、異教徒でもあり、将来も期待できないフランクへの評価は“Poor boy”(37)、“A gentleman”(38)、“He’s a poor boy. I feel sorry for him”(53)と同情的である。

また、アシスタントとして働き始めてからも、モリスはフランクといることを楽しんでいるし、“Morris liked Frank’s company”(81)、まるで父親のように、自分の失敗を繰り返すなど、フランクに教育を受けるよう諭したりもする。父親モリスは、フランクがWard Minogueと共に自分を襲った犯罪者であることがわかった時、彼を店から追い出す。にもかかわらず、肺炎にかかって死ぬ前、自分の人生を振り返りながら、ヘレンのことを思うときに頭に浮かぶのはフランクであって、ナットやルイスではない。『アシスタント』の父の心を受け継ぐ花婿はおそらくフランクになるであろうことは、フランクが割礼を受けてユダヤ人となり、モリスの代わりに食料品店を切り盛りするところから暗示される。

マラマッドは「最初の七年間」から徒弟的人物像を発展させ、フランクを創りだした。しかし、第二の系統の物語から『アシスタント』へと引き継がれたのは、徒弟的人物像の物語というよりも、弟子となる息子候補を選ぶ過程を描くための枠組みであった。なぜなら、短編では、徒弟的人物の修行の物語が描かれないからである。弟子の修行の物語は、もう一つの枠組みを通して描かれる。

第三の系統：父のいない息子の物語

第三の系統の物語、「変わってしまった場所」には、父のいない息子、息子を失った父という、『アシスタント』と同じ境遇の父と息子が登場する。父のいない息子 Wally Mullane は、アルコール依存の若者だが、家を追い出され、行く宛てがない。浮浪者となって生家の近くをさまようウォリーに唯一優しくしてくれるのは、幼なじみの父親、Davidoである。ダヴィドの息子 Vincent は、父に叱りつけられたことをきっかけに、姿を消したきりである。父はウォリーの髭を剃ってやりながら、息子のことを思う。当然、いなくなった息子を求める父は『アシスタント』のモリスや、短編に登場した、息子のいない父親たちを思い出させる。しかし、この父と息子の間には、精神的継承は行われぬ。息子ウォリーは、『アシスタント』の中で、二人の人物に分裂して使用される。アルコール依存で糖尿病を患い、札付きの悪で家族からも疎まれ、警官をしている家族から叩きのめされる、たとえば、フランクと一緒に強盗を働いたワードが思い出される。そして、眠る場所を探して、近所の地下室を物色する描写は、『アシスタント』でフランクが最初に登場する場面に使用される。この短編に現れる、行く宛てのない若者は、父との出会いによって徒弟的人物像が誕生する前のエピソードとして、『アシスタント』に組み込まれているようである。

マラマッドの主人公たちは、浮浪者であったり、飲んだくれになってみたり、フランクのように、いとも簡単に強盗の一味となって一攫千金を夢見たりする。息子にとって、父がいないということは、すなわち、見習うべき模範がいないということであり、世の中の生き方を知らないまま、自分の力だけで生き抜いていくことを迫られる状況に置かれることを意味する。息子のいない父が、新世界への同化の過程で置き去りにされる、旧世界の価値観の表象であるとするなら、父という水先案内人のいない世界は、アメリカという新天地と置き換えることもできる。父のいない息子は、このような水先案内のない世界を生きていく、アメリカの息子たちを表わすと言ってもよいだろう。その意味でも、『アシスタント』の息子フランクが、短篇作品と異なって、異教徒である（あった）という点は大きな意味を持っている。短編では、ユダヤ人同士の中で父から息子への継承が語られたが、フランクがイタリア系の若者であることにより、作品により普遍性を持たせることができるからである。

前章で、娘しかいない家族という構図が、息子のいない父親の精神の継承者、弟子を選び取る物語として機能することを述べたが、父の後継者となるためには、父の精神を理解し、実践しなければならない。マラマッドの言葉で言えば、弟子“apprentice”となるフランクは、浮浪者から父の継承者となるための修行、自らの運命と人生を変える過程に“in the process of changing his fate, his life”、一步を踏み出す。異教徒フランクがモリスの食料品店でアシスタントを勤めることによって、弟子として何を学ぶのかを象徴するのが「ユダヤ人とは何か?」という問いである。『アシスタント』における「ユダヤ人」が、普遍的な倫理的象徴であり、人間が背負わなければならない責任、守らなければならない人間性を表すメタファーであることには疑問をさしはさむ余地はないであろう²。フランクが修行の中で継承するのは、父親の人間性そのものなのである。

『アシスタント』では、ユダヤ人家庭の息子候補の中に、イタリア系の若者フランクを連れてくることにより、孤児の息子フランクが「ユダヤ人」とは何か、つまり、守らなければならない人間性とは何かを理解し、成長する過程が描かれる。フランクの再生は、モリスの葬式で、誤って墓穴に落ち、這い上がってくる場面に象徴される。物語は、彼が割礼を受け、ユダヤ人となることで、正真正銘の息子になったところで終わる。

このように、『アシスタント』では短編にあらわれた三つの系統の物語が、融合して一つの物語を構成する。食料品店を背景に、息子のいない父親を登場させることで、花婿候補選びを通して人間性を問う物語が、また、フランクという異教徒の孤児を登場させ、ユダヤ人とは何かを追及させることで、若者の人間的成長の物語が生まれる。そしてこの父の物語と息子の物語が結合することで、父と子が互いを理解しあい、人間性を継承していく物語を構成する。『アシスタント』において、息子のいない父、父のいない息子の構図は、アメリカという新世界の姿を象徴的に表わすとともに、そのアメリカに生きる、一人娘しかいないユダヤ人の家庭に、イタリア系の息子を連れてくることによって、人間性を受け継ぐ物語を動かす一組の仕掛けとして機能しているのである。

結 び

以上、『アシスタント』における息子のいない父、父のいない息子の物語が、どのように作り上げられていったのかを初期短編の中にたどってみたが、息子のいない父も父のいない息子も、一つには、ユダヤ人の世代間の断絶のみならず、移民から成り立つアメリカ的状况を表わす比喩となる。マラマッドの物語に描かれたユダヤ系移民に限らず、移民たちはアメリカにやって来ると同時に、旧世界を捨て去り、新しい世界に順応しなければならない。新しい世界には新しい世

界のルールがあり、父の持つ古い世界の価値観と流儀に従っているだけでは生存さえ危うくなりかねない。たとえ生き残ったとしても、みじめな貧窮生活が待っているだけである。したがって、父はその精神的遺産を継いでくれる息子を失う。また、息子にとっても、新しい世界を導いてくれるはずの父が存在しない。アメリカの地を踏むと同時に父と息子の旧来の関係は無意味なものとなり、父も息子も、新しい後継者、新しい指導者を模索せざるを得ないのである。しかし、一方で、マラマッドは『アシスタント』で、その息子のいない父と父のいない息子を邂逅させ、義理の息子を作り出すことで父の精神を受け継ぐ物語を作った。このような構図を作ることによって、アメリカ的状况においても人間的精神の継承が可能であることを示そうとした。

短編集 *The Stories of Bernard Malamud* の前書きで、「両親の小説上の片割れである人物を作り出すときに、私の頭には両親がいた」とマラマッドは書いた。その言葉どおり、マラマッドの初期の短編小説では、移民であるユダヤ人の両親、およびその周辺のできごとをモデルとした物語が展開する。そのユダヤ系移民たちは、現実世界では、豊かな生活を求めて、急速に競争社会の階段を駆け上っていく。彼らは、貧しい生活から抜け出すと同時に、古い伝統的、宗教的価値観を捨ててゆく。マラマッド自身もある意味ではその一人である。彼は、自分の結婚に際し、父親との間にあった出来事について回想する。

He had sat in mourning when I married my gentile wife, but I had thought it through and felt I knew what I was doing. After the birth of our son my father came gently to greet my wife and touch his grandchild. I thought of him as I began *The Assistant* and felt I would often be writing about Jews, in celebration and expiation, though perhaps that was having it both ways. I wanted it both ways. I conceived of myself as a cosmopolitan man enjoying his freedom. (6)

旧世界からアメリカへ渡ってきた父親が持ち続けていた伝統的な価値観を、受け継ぐことができなかった息子バーナードの、父を裏切ったような気持ちがここには吐露されている。マラマッドが息子のいない父、父のいない息子を作品に登場させるとき、アメリカ社会への同化の過程で、父母の世代が信じていた価値観を次々と捨て去っていく、同世代のアメリカのユダヤ人たちと共に、ユダヤの伝統を断ち切った自分自身の姿を、そこに重ね合わせていたであろう。しかし、その一方で、たとえ形式上の伝統は継承されなかったとしても、父の人間性だけは、決して失われることなく息子に受け継がれていることを、マラマッドは物語の中で示そうとしていたのかもしれない。

注

- 1 マラマッド自身も、インタビューの中で、牢獄のモチーフについて次のように述べている。
Perhaps I use it as a metaphor for the dilemma of all men: necessity, whose bars we look through and try not to see. Social injustice, apathy, ignorance. The personal prison of entrapment in past experience, guilt, obsession—the somewhat blind or blinded self, in other words.
- 2 ユダヤ人について、例えば、Robert Alter は、“To be a shlemiel—which, for Malamud, is almost interchangeable with the idea of being a Jew—means to assume a moral stance, virtually the only possible moral stance in his fictional world.”と、Theodore Solotaroff は“a type of metaphor—for anyone’s life—and for a code of personal morality and salvation that is more psychological than religious”と述べている。

Works Cited

- Malamud, Bernard. *The Natural*. New York : 1952.
- . *The Assistant*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1957.
- . *A New Life*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1961.
- . *The Fixer*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1966.
- . *Dubin's Lives*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1979.
- . *The People and Uncollected Stories*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1989.
- . *Idiots First*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1963.
- . *The Magic Barrel*. New York : Farrar Straus & Giroux, 1958.
- . "A Note to My Norwegian Readers on *The Assistant*." *Talking Horse : The Life and Writings of Bernard Malamud*. Ed. Alan Cheuse & Nicholas Delbanco. New York : Columbia University Press, 1996. 86 – 87.
- . "Introduction to The Stories of Bernard Malamud." *Talking Horse*. 5 – 9.
- Malin, Irving. *Jews and Americans*. Carbondale : Southern Illinois University Press, 1965.
- Stern, Daniel. "The Writer at Work." *Talking Horse*. 10 – 24.
- Alter, Robert. "Jewishness as Metaphor." *Bernard Malamud and the Critics*. Ed. Leslie A. Field & Joyce W. Field. New York: New York University Press, 1970. 29 – 42.
- 上田和夫. 『イデイツシュ文化』. 東京 : 三省堂, 1996.
- Solotaroff, Theodore. "The Old Life and the New." *Bernard Malamud and the Critics*. 235 – 248.

Summary

Fathers and Sons in the fiction of Bernard Malamud -From the Early Short Stories to *The Assistant*-

In many of Bernard Malamud's novels, the fathers have no son, while the sons have no father. In a sense, this absence of father for boys and that of son for fathers seem to reflect the breakdown of traditional father-son relationship in Jewish-American society at the time. In *The Assistant*, however, an Italian assistant, Frank, seems to follow in the footsteps of a Jewish grocer, Morris, actually and spiritually. Malamud once mentioned three short stories as the source of *The Assistant*: "The Cost of Living," "The First Seven Years" and "The Place Is Different Now." These stories and similar stories included in PUS are analyzed to make clear how the father-son relationships in the short stories are developed into Morris and Frank in *The Assistant* and what the relationship signifies in the early fiction.